様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月８日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22720204
研究課題名（和文）　日本語教師間協働における現場的課題克服のための仮説モデルの構築とその分析
研究課題名（英文）
Research of the hypothetical model for a Japanese teacher's collaboration.
研究代表者
中山　英治（ NAKAYAMA　EIJI ）
早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授
研究者番号：50546322

研究成果の概要（和文）：大きく分けて次の２つの成果があった。それは、日本語教師の協働体験モデルを構築することができたことと学会発表や論文などを通して、それを広く社会へ還元できたことが本研究の成果となった。前者については、バンコク（あるいは近郊）における日本語教育機関に所属する日本語ネイティブ教師の教師成長につながる仕事観や指導観の変容を見出すことができた。その変容過程の中でも特に重要な協働に資する諸概念が抽出できた。また、学会やシンポジウムでの仮説モデルの提示により、教師間協働に対する日本語教師の認識を深めることができ、ネイティブ教師の存在感や非ネイティブ教師の積極的な役割意識を見出すこともできた。

研究成果の概要（英文）：　The results of this research are the following two results.
It is that one of the results has presented the hypothetical model for collaboration between teachers in the first place. It was exhibited Japan and overseas by writing a paper and a society announcement. We can tell a new teacher about the subject of collaboration using this hypothetical model. Moreover, we can give the opportunity of self-growth to an experienced teacher. By research of collaboration between teachers, we can deepen the recognition to collaboration and can fully promote practice of collaboration after this.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
22 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
23 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：タイ、教師間協働、M-GTA、仮説モデル

１．研究開始当初の背景

教師という仕事をいま一度振り返ってみると、大きく２つの役割が見えてくる。一つは狭い意味で、教室での授業の方向性や計画を練り、それを学習者とともに実践して、ある一定の基準で評価をし、これらを繰り返すという授業の実践者としての存在である。もう一つの広い意味は、今述べた教育実践の現場としてある教育機関で、その教育機関にやはり実践者として存在している他の教師との協働の中で教育システムを遂行する存在である。いわば、人類の文化、人間としての基本的な営みの継承を教育という部分から支えている存在者としての意味である。教師

にとって目の前にいる学習者の学習過程や自らの教育力を反省し、それを改善していこうと努力する態度は、最も大切な仕事の一つであるが、一方、教育現場における教育の存続を担うために他の教師との協働という営みを充実することも忘れてはならない仕事の一つであるといえよう。従来、海外の日本語教育現場の現実的な課題として、現地の日本語非母語話者教師と現地に赴いた日本語母語話者教師との間で、「協働がうまく行かない、どうしたら協働をうまく実行して、より充実した日本語教育を実現できるのか。」といった壁にぶち当たっている教師の声が指摘されているが、これは過去の問題ではない。現在も解決されないまま残っている課題でもある。これから日本語教育が国内の留学生の数を増やして、さらに世界にも新たな普及先を求めていくには、この日本語非母語話者教師と日本語母語話者教師との協働の問題は、より早急に改善されるべき最優先の課題である。しかしながら、これまでこうした課題は、当該教師の個人的な対応で回避したり、問題を指摘し共有したりする程度の試みで終わってしまっていた。本研究は、こうした協働の抜本的な改善を求めるべく、まずは現在の協働現場で日本人教師らがどのような協働を体験しているのかを調査するために始まった研究である。特に協働現場に入ったばかりの教師やこれから協働現場に向かう教師にとって有意義で価値の高い協働の体験を報告する研究調査である。

本研究の調査国は、研究代表者が以前日本語教育に従事していたことのあるタイである。国際交流基金発行の『海外日本語教育機関調査』(2006) によれば、タイ国の高等教育機関の日本語教師数は半数がタイ人、半数が日本人であると記述されている。均衡のとれた教育現場の協働の意味は大変大きいものである。また、先行研究でもネイティブ教師とノンネイティブ教師の間の異文化間ギャップの問題が指摘される中で、理想的な協働のあり方を考える必要性が指摘されてもいた。本研究はそうした教師間協働の現場の問題を明示化してその改善方法を探る研究であった。

２．研究の目的

研究目的の一つは、理想的な協働のために必要な教師間協働のモデル構築であった。この教師間協働モデルが構築されれば、それを元にして、これからタイの教育現場へ向かおうとする新任教師にとって、今後に待ち構えている問題や課題を前もって見通すことができる。新任教師にとってそうした準備ができることは、新しい職場でスムーズに仕事を遂行する上でも効果的であると言える。

また、現場に即した課題克服の方法を明示化することも重要な本研究の目的である。タイの日本語教育機関における協働の実現は、まだ比較的少ない。しかしながら、理想的な協働の実現をインタビューしてみると、現場の教師（特に日本語ネイティブ教師側）の中には、タイ人教師との協働に積極的な意味を見出そうとする声がある。そして、その声の文脈・背景には、日本語ネイティブ教師としての存在価値を考慮したり、またその価値を超えるところにタイ人教師の価値を見出したりと、積極的な「教師間役割」の意識が芽生えている事実があった。どうしたら、そのような理想的な協働のあり方を実現できるのか、現場の問題に即して協働を実際に実現するための方策をどうしたら考えられるのかを調査する必要があった。本研究の目的は、こうした意識の部分に夜ところが大きいのである。

３．研究の方法

これまでにも教師の役割の研究はあった。特にアンケート調査などを援用して、その量的な意識を把握するタイプの研究が進んでいた。しかしながら、そうした量的な研究調査では、現場の人間関係の微妙な問題を孕むような教師間協働の研究には、向かない面もあった。傾向や汎用的な事実を明らかにすることと共に現場に特化した課題の特徴やその課題に個別に立ち向かっている教師の体験を十分把握するためには、質的な研究が行われる必要があった。

本研究で最も重要なデータの分析方法は、質的研究法の一つである M-GTA 法であった。この方法は教師の内面を考察するのに適しており、量的方法では考察しにくい概念的側面を掘り起こす方法であった。現場の課題を克服するためにはこれまで量的な考察では落ちてしまっていた重要な教師の体験性を本研究では重視したわけである。

具体的に言うと、本研究における M－GTA 法は、次のような段階を取った。

①対象とするタイの教育機関で活躍する日本人教師にインタビューを実施する

②インタビューは、半構造化インタビューとした。これは、現場の教師にとって何が重要な課題であるのか事前に明確にできない部分があり、リサーチクエスチョンを立てながらも、同時に語りの中で現れる重要な概念を落とさないための方策であった。

③リサーチクエスチョンは、「現場の日本人教師はタイ人教師との協働において何を考え、何を体験しているのか」である。質問項目は、「これまで NNT と一緒に教えてよかったこと」「これまで NNT と一緒に教えて悪かったこと」「今後も NNT と協働したいかどうか、するならど

のような授業を協働したいか」という３つの質問が中心であった。

④対象者の選定では、教師の経歴や職場での立場を考慮して、理論的サンプリングを行なった。理論的なサンプリングは調査の中途でも継続して考慮された。

⑤インタビューの実施は、対象者一人につき、約１時間から１時間半行い、すべてのインタビューデータを文字化した。

⑥文字化されたデータを元にしてM－GTA法で推奨されているワークシートを作成してそこからコーディングを行った。

４．研究成果

本研究の成果の１つは、これまでの教師間協働研究に関する修正版や改訂版の仮説モデルの構築や更新ができたことであった。これにより、教師の体験性を明示化できて、これから現場へ向かう教師にも既に現場で活躍している教師にも共に自らの協働体験の位置をはかることが可能になった。もう一つの成果は論文や口頭発表などを通して、この協働体験のモデルを広く一般の日本語教育関係者へ提示できたことであった。これにより日本語教育における協働促進が期待できる。

修正版、改訂版の仮説モデルを具体的に提示すると、次のような概念を含んだ仮説モデルであると言える。

【仮説モデルの主要な概念】

①『新しい協働の役割観』

②『協働の可能性』

③『日本人教師のまなざし』

④『本質的な指導観・仕事観』

⑤『仕事観・指導観サイクル』

①の『新しい協働の役割感』には、「臨機応変な協働」や「積極的個人プレイ」、「ネイティブとして」といった概念が現れた。これまで指摘されてきた日本人とタイ人の固定的な役割意識ではなく、もっと流動的で、ダイナミックな関係を想定する役割観である。役割観をそうすることによって、現場の課題を克服しようという工夫でもあると言える。

②の『協働の可能性』では、「協働を支える価値観の一致」や「協働体験からの自己成長」が見出せた。協働の大変さや苦労を前面に押し出すのでは理想的な協働が前に進んでいかない。そうではなく、協働の価値観を日本人もタイ人もお互いにすり寄せていきながら、共同の中で成長する自分に気づくことが重要であることがわかった。

③『日本人教師のまなざし』を見ると、日本人教師の見ている事実や気づきが確認できて、従来日本人の特徴であったような評価ぐせや周りを気にする性質などが浮き彫りになった。この概念は、協働の中でタイ人教師に知ってもらいたい事実であり、それが共有されることにより、協働の促進が進むと考えられる。

この他にも④や⑤などは、協働の中でやはり「仕事観と指導観」が大きな柱になっていることをうかがい知ることができる概念であった。日本人教師もタイ人教師も実際に一緒に仕事を行う上で、お互いにどういう体験をすることになるのか、どうしたら問題を回避できるようになるのかということが仮説モデルによって理解されやすくなった。

本研究の重要な研究成果として、「教育経歴による段階的な教師の変容」の事実が明らかになった。タイで活躍する教師の経歴を大きく３期（初期：１・２年目、中期：３年目以降、長期：１０年もしくはそれ以上）に分けてデータを分析してみると、初期では目の前の仕事に翻弄される日本人教師の姿があるのだが、３年目あたりで仕事の中の工夫が表れ、うまく処理できるようになっていくという事実がし指摘できた。また、重要なことはこの３年目の段階からタイ人教師による承認がなされ、日本人教師の居場所が職場に明確になっていくことが確認できた。このことから、タイの教育現場で日本人教師が充実した仕事を行うには３年くらいの時間が必要であるということがわかり、そこから実りの多い経歴を経験していくことができるようになっていくと言える。

この段階的な変容の中で、自己実現を可能にするための要素のひとつに「タイ語の使用や獲得」が見いだせた。これは、授業の中でも職場のあらゆるところで必要になるタイ語の価値であり、身につけると協働にとってプラスに働く面である。同時に職場の教育システムを理解することもよりよい協働を実現するためになくてはならない要素であることもわかった。日本の教育制度やシステムとの違いを認識することで、タイの教育機関の仕事の方策を身に付けていけるのである。

さらに教師の変容の中で見い出せたことは、日本人教師は学生との距離をうまく測ることができるようになるとよりよい仕事につながっている事実である。また、対人教師への気遣いや心配りなども職場における人間関係を構築するためになくてはならないものであることもわかった。こうした面は、日本人教師が得意とするところであり、理想的な協働の資質として十分認識してくべきところであると言えよう。

本研究は、教師間協働のための仮説モデルを提示した研究であったが、大学が主なフィールドであった。今後は、この現場の拡大を意図して中等教育期間（高等学校）における協働の研究へ入っていきたい。特に現場で協働が重要な位置を占める高校でどのような事実が起きているのかを調査する必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
片桐準二・カノックワン片桐・池谷清美・中山英治「タイ高等教育日本語教育協働現場における『成長する教師』の可能性－タイ人教師が経験する協働現場の実態分析から－」

〔学会発表〕（計３件）
中山英治「タイの日本語教育現場で協働体験を持つ日本人教師の仕事観・指導観の段階的変容」タイ国日本語教育研究会年次セミナー 20120317、バンコク（タイ）

中山英治「タイの協働現場で働く日本人教師の協働の可能性への気づき－理論的サンプリングによるデータ収集と概念の再検討－」日本語教育学会研究集会第７回（関西地区）20110917、甲南大学（日本）

高橋雅子・門脇薫・辛銀眞・松尾憲暁・中山英治「教師間協働に関する日本国内外の事例紹介とより良い協働に向けた提案－協働体験を持つ教師の内省から－」20110820、天津（中国）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中山　英治（　NAKAYAMA EIJI　　）

研究者番号：50546322

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

早稲田大学日本語教育研究センター
准教授（任期付）